HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Description	各務時報 104号と同時に撮影
Citation	各務時報, 102
Issue Date	1938-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77686
Type	article
File Information	A010_13929597102104110_Part5.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

各務時報

昭和十三年六月二十八日印刷
昭和十三年六月三十日發行
岐阜高等農林學校文藝部
編輯兼發行者　吉川明
岐阜市七軒町十二番地
印刷者　河田貞次郎
岐阜市七軒町十一番地
西濃印刷株式會社
岐阜支店

芒亭書屋談叢

高農を取り圍いて最近に澤山の家が建つた。今度出來た大きな病院の南側を通りぬけて東に行く事三四丁、其處は私が好んで夕方散歩するところであるが、このあたりから振り返つて西北方に展開して居る一望の景觀を眺めると、そこに立ちならんで居る澤山の洋風の建物は大地の大きなうねりによく調和して西洋の風景畫にでも見る様な景色である。雲の色が紅くやけて居る時には特に見事である。

十年前の此邊を知つて居る人には、此景觀は全く蒼海の變である。此頃は高農の東側まで見渡す限り一面に桑園であつた。それより更に二三十年前の事を知る人は、中仙道の此邊にはよく追剝が出たものだと云ふ。

兎に角こゝ二十年ばかりの間に此臺地は、一躍して現代文化の最高水準を見得る土地となつた。知識、技術、スポーツ其他文化のあらゆる方面に於いて、最高度の水準を少くとも理解し利用して居る人々が其文化的事業に從事して居る。學校に兵營に工場にグラウンドに病院に。

三十年前頃迄は、この邊は恐らく僅かの農民達が採草地位に利用して居た丈だと云へば、これが蒼海の變でなくして何であらう。

數年前まで我が學園内に考古學の會があつた。多い時は殆ど毎月一回遺蹟調査に出掛けたものである。相當遠いところに旅行した事もあるが、最も多くは近村に出掛けた。境川放水路と三井山との間は今麥畑になつて居るが其附近一帶には何十と云ふ古墳があつた。又三井山と中山道との間の麥畑には祝部式土器の破片が殆ど到るところに散布して居た。三井山の山麓で見事な磨製石斧を一行の者が發見した事もあつた。岐阜附近の考古學生達は私が夕方よく散歩すると云つた病院の東の方の畑地一帶を、石器時代遺物散布地として折々採集に出掛けて來る事がある。

石器時代と云へば少くとも三千年も昔、此高原の一帶には相當數多く當時の人々が住んで居たに相違ない。この邊は、當時決して人裏をはなれたところでなく、人の息のかゝつたところである。幼稚ながらも當時の文化の活潑な營みがこの黒土の上で演ぜられて居たのである。石斧は當時の文化の破片である。

又古墳時代と云へば新らしくとも千五百年は續いて居る。三井山の山麓の古墳群を見れば、古墳時代にも此附近は相當殷盛な文化の中心をなして居た事が分る。

星移り歳變る事幾百千、今日又此高原には現代文化の精粋が、同じ此黒土の上に躍動して居る。私は夕方散歩の途上に石斧など發見した時に、此高原の人生の長い歴史を色々に思ひめぐらして、詩人の様な夢にひたることがある。

「今から千年の後の考古學者は此高原の土の中から現代文化の破片として何を掘りあてるであらうか」そんな事を考へた事もある。

（芒亭）

各務時報

芒亭書屋談叢

去る二月十七日學校神社の月次祭の祭禮のあとで、今度卒業する諸君がクラス毎に記念樹の植ゑつけをした。本校では卒業生の記念樹はこれが嚆矢である。これから年毎に新卒業生の記念樹がクラス數丈づつ加はつて行く譯である。

私等は常に先へ〳〵と將來の夢に心を躍らすと共に、過去の自分の足跡を愛撫しては自己を勵まし自己をいたはつて居るものである其足跡は大なる足跡も、いと小なる足跡も、共に自分自身にはかけがへのない尊いものである。

私は少年の頃、其頃よく遊んで居た鄉里の自分の家の附近にあつた小高い丘の上の椿の木の樹皮に自分の名の頭文字を小刀で彫り込んだ事がある。そしてそれから餘程年を經て、當時遊學して居た東都から歸省した時、椿の木の文字が妙にふくれた様になつては居ても未だ讀めるのを見てよろこんだ事がある。其後更に何年かの後復た歸省した時、丘の附近の樹木は全部伐り倒されて、其邊は皆蜜柑畑になつて居た。私は其を見て、非常に尊いものを失つた様な失望を感じた事を今も記憶して居る。シューベルトの「リンデンバウム」の歌詞の中にも、鄉里の家の前の菩提樹に文字を彫り込んだ追憶が述べてある。鄉里の思慕を其菩提樹に呼び起し、更に少年の日の追憶を其處に彫り込まれた文字に繋がへらして居るのである。

死んだ愛兒の玩具をいつまでも大事に保存して、死兒の齡を數へつゝ思慕の情やるかたなさを空しく慰むる親の心には、愛兒の體臭の加はつたものはどんなものでも尊いのである。

卒業する人々の一クラスの名の下に、其總力によつて作られたもの或ひは一クラスの全員の呼氣のかゝつたものとして、學園の中に其儘に永久に殘るものとしては記念樹の外に何があるかしら。記念樹は永久に其クラスの人々の云はば客觀的標識である。

あの記念樹をあの天氣のよい早春の一日、クラス全員の手をかけて植ゑつけ、そして其あとで一同神社に參拜したあの時の記憶は、永久に諸君の心に殘るであらう。

だが、そんなセンチメンタリズムは今はどうでもよい。勇躍して早く生活の戰線につくがよい。

そして雄々しく強く正しく存分に活躍するがよい。國家の爲に又自己の爲に。現實の歴史的大偉業は、諸君の新鮮なる力を至るところで待つて居る。記念樹は、大丈夫大切に保存してあるであらう。

（芒亭）

昭和十四年三月七日印刷
昭和十四年三月十日發行
岐阜高等農林學校文藝部
編輯兼發行者　吉川明
岐阜市七軒町十二番地
印刷者　河田貞次郎
岐阜市七軒町十一番地
西濃印刷株式會社
岐阜支店